## 「いのち」と向き合う旅

# 「最期自ら決める」

## スイス、オランダ　安楽死という選択

ストーリー

高校の英語教師、靖子さんは日本人学校で音楽を教えながら2人の子供に恵まれたが、87年に甲状腺にがんが見つかった。

手術や放射線治療で闘病を続け、52歳を迎えた97年春に骨転移が見つかる。想像を絶する痛みに襲われ、「打つ手がない」と告げられた。

安楽死は語り尽くした末の選択だった。

「迷いはありました。でも、靖子は自分の病状も知らずにがんで亡くなった姉の最期を悲嘆して、『自分の最期は自ら決める』と思いを募らせ、私はそれを尊重しました」

夏が終わり、痛みは限界に達して衰弱が進んだ。医師の同意を得て「安楽死の要請書」を作成した。

そして9月17日の夕刻、別れのパーティーを開いた。家族と友人がベッドを囲み、ワインで乾杯。ロブさんがマグロのすしを靖子さんの口に運ぶと、「(しょうゆの)つけすぎ」とつぶやいて、小さくほほ笑んだ。

午後8時、医師が来訪。子供と友人は夫婦を居間に残してキッチンに移った。

「ありがとう」「また一緒になろう」。手を握って交わした最期の会話。「ドクターが注射を打つと、まるで人形のように目を閉じて、穏やかに息を引き取りました……」

あの日から17年。ロブさんは時折涙を浮かべながら、記憶の糸を紡いだ。

靖子さんは家族に残した日記に、感謝と別れの言葉をつづり、こう結んでいる。〈あと十分で逝きます。本当にありがとう〉

「靖子は『痛みで心が折れてしまう前に、人生を終わらせたい』と強く願っていました」

チューリップの花がオランダに春の訪れを告げた4月半ば。アムステルダム近郊、アムステルフェーン市の住宅街にあるネーダコールン家の居間で、ロブさん(69)が安楽死で逝った妻に思いをはせた。

10代で海を越えた文通を始め、1972年夏に待ち合わせたロンドンで恋に落ちて、12月にアムステルダムで挙式した。ロブさんは「人生のしまい方について考えてみないか」

今春、長野県松本市にある神宮寺の高橋卓志住職(65)に誘われて、終末期の緩和ケアに取り組む英国と安楽死を認めるスイスとオランダを巡り、「いのち」と向き合う人々に出会った。

3面につづく

自宅のギャラリーで、ロブさんは言葉を詰まらせながら別れの日を回想した。壁には靖子さんが描いたパステル画があった＝オランダ・アムステルダムで、萩尾信也撮影

MAINICHI
毎日新聞
5月18日(日)
2014年(平成26年)
発行所：大阪市北区梅田3丁目4番5号
〒530-8251　電話(06)6345-1551
毎日新聞大阪本社

愛されて60年
日本製です

HARUTA SHOES
www.haruta-shoes.co.jp

ニュースの扉

近畿
定年
スプ
今週
メッ
「問

今回のSの取材は

萩尾信也（東京社会部部長委員）　1980年入社。社会部、外信部副部長などを経て2011年から現職。03年の連載企画「生きる者の記録」で早稲田ジャーナリズム大賞を受賞。東日本大震災で長期連載した「三陸物語」には日本記者クラブ賞が贈られた。今回、写真も担当した。

# 「よき生」とは何か

Sストーリー

## 人生のしまい方 欧州の旅

# 一人称の死 見詰め

1面からつづく

「多くの死に接してきたが、どこかで人ごとのように見ていた。高齢者の仲間入りをして、一人称の視線で見詰め直そうと思う」

昨秋、長野県松本市の住職、高橋卓志さん(65)はこう言って旅を持ちかけてきた。「一人称の視線」という言葉が心をかきたてた。

高橋さんとの出会いは12年前、「兄貴分」と慕う佐藤健記者に紹介された。還暦前に末期がんを患った先輩は、最期の日々を「生きる者の記録」という題で新聞に連載し、私はその口述筆記を続けていた。

臨終の前日。呼吸困難に陥った先輩に、私は「鎮痛剤を増やすと眠りにつけるそうです」と医師の言葉を伝え、先輩は「それを頼む」と即答した。

あれは死の選択だったのか？　問いかけは今でも続いている。

高橋さんは、一貫して「生老病死」の現場に関わってきた。お年寄りのデイサービスや終末医療にも携わった。旅を発起した原点には、先代の父親（享年81）の死があった。1992年に前立腺がんで倒れた先代は、激痛に襲われてもなお周囲を気遣い、周囲を笑わせた。

高橋さんはそこに「禅僧」の姿を感じたが、後に母親から先代の残したメモを見せられてがくぜんとした。体の痛みを書き連ね、最後に「万事アセリ感じる」と記してあった。

「父は平静を装っていましたが、内心は不安と苦しみにあふれていたのでしょう」。高橋さんの胸中に「一人称の死」が芽吹いた。

旅には、2人の同伴者が加わった。

第一生命経済研究所主任研究員の小谷みどりさん(45)。東日本大震災の翌月に、大手企業に勤める夫が東京の自宅で急逝した。

「朝、部屋をのぞいたら、亡くなっていた」

外国人上司が放射能汚染を恐れて国外に脱出し、夫は休日返上の激務が続いていた。

「死因はよく分からない。『どないしたん』と聞きたくてもあの人はいない」

名古屋で医療関係の翻訳業をしている辻本淳也さん(38)は、出発直前に加わった。

母好子さん（享年62）の墓がある高橋さんの寺を訪ね、旅に誘われた。3年前にがんで逝った好子さん。

「賢い患者になって医療者との対等な関係を築こう」。90年代にNPOを組織して、医療と患者の橋渡しを続けた。

2010年夏に胃がんが見つかった。入退院を繰り返した。

「闘病中の母は、仮面をかぶるように賢い患者を装っていました。一人でトイレに行けなくなった時の、心が折れてしまったような顔を覚えています」

人生のしまい方を考える欧州路。それぞれに向き合う死があった。

チューリヒの街中にある広大な公営墓地。その一角は芝生が広がり、土中には遺骨が埋葬されていた。この日も野辺の送りが行われていた

「EXIT」には、自宅で逝くことができない人のために用意された特別な部屋があった

# 個の尊厳で「出口」を

スイス中部の都市チューリヒは、春の陽気だった。

公営墓地を抜けた住宅地の中に、白壁の2階屋が現れた。インターホンのプレートに、「EXIT（出口）」の文字。自発的安楽死に取り組むNPOだった。

病気やけがで心身に回復し難い苦痛を抱える人々が、自らの人生に終止符を打とうと決断した時に、手助けをしている。

会員はスイス国籍か永住権の所有者で、平均年齢は63歳。人口800万の国で会員は7万人を数える。医師の同意を得て、自ら人生を終える意思を「事前指示書」で表明する。会費は約3000円。

昨年は約800人が協力を依頼し、半数近くが実行。多くは自宅で薬を飲んで人生に終止符を打った。

「国民の8割近くが活動に理解を示しています」

統括責任者のハンスさんは説明した。自殺の助長にならないのだろうか。

「自殺イコール安楽死ではありません。例えば、失業や失恋を理由に死を望む人を手伝うことはありません。私たちの活動は一種の自殺予防です。選択肢を持つことでやすらぎを得ている人がいます」

個人の尊厳を重んじる価値観に根ざしているように思われた。

同じ印象は、アムステルダムにある「NVVE」でも感じた。「オランダ死の権利協会」の略称だ。人口1600万の国で15万人が会員に登録している。

「01年に安楽死を容認する法律ができました。個人の尊厳と権利を尊重することに重きを置く国民性が、（死の）自己決定を可能にしました」。本部事務所で、最高責任者のペトラさんは言った。

英国スコットランドの首都エディンバラ。がん患者支援施設「マギーズセンター」のドアを開けた。96年に開所。現在では国内15カ所に広がっている。

看護師や臨床心理士が常駐し、誰もが自由に出入りして、医療相談やカウンセリングを無料で受けられる。年間80億円の運営費や人件費はチャリティーでまかなわれていた。

「患者や家族に診断や治療についての正しい情報を伝え、不安や悲しみを抱える人には気持ちをはき出せる場所を提供します」

40代のアンダーソン施設長は言った。

財源や地域格差の問題はあるが、無償で在宅医療や訪問介護を行う医療制度があり、24時間介護が可能だった。高齢者の多くが自分の家で暮らし、家で逝くことを望み、病院で亡くなる高齢者は半数を切った。

「我が国では安楽死は認められていませんが、苦痛を取り除くためモルヒネなどを増量し死期が早まることはあります。安楽死が死の選択を尊重することだとすれば、私たちの活動は生きることのサポートです」

安楽死について尋ねた際の答えである。

旅の終わりに私たちは、97年に妻を安楽死で見送ったロブさんを訪ねた。安楽死を容認する法律の成立前ではあったが、当時は事実上許容されていた。

ロブさんは言った。

「私たちは不安や恐れを分かち合いました。だから息が止まった時、子供に『祝福してほしい』と声を掛けました」

価値観や先入観を揺さぶられる2週間の旅だった。

「学びの多い旅でした。生と死が、つながって見えるようになりました」。辻本さんの感慨だ。

小谷さんは言う。

「日本人は死を残された者の視点で論じがちです。それでは個人の尊厳や自己決定は根付かない」

そして、高橋さんは帰国後、がん患者の支援施設を設立する準備を始めた。「生き方や死に方を論じ合える場所づくりです。先入観を持たず、目をそらさずにいきましょうよ」

「安楽死」という日本語は英語の「euthanasia」の翻訳で、語源は「よき死」を意味するギリシャ語に由来する。病苦や死の恐怖から解放されたいという願いは、万国共通の思いである。

「よき死」とは何か？

「よき生」とは何か？

のど元に突きつけられた問いである。